

# プリティ・ヘレン

2006(平成18)年2月21日鑑賞(東映試写室)

★★★



監督=ゲイリー・マーシャル/出演=ケイト・ハドソン/ジョン・コーベット/ジョーン・キューザック/ヘクター・エリゾンド/ヘレン・ミレン/フェリシティ・ハフマン/ヘイデン・パネッティ/ア/スベンサー・プレスリン/アビゲイル・プレスリン (ギャガ・コミュニケーションズ、アニープラネット配給/2004年アメリカ映画/119分)

……ゲイリー・マーシャル監督による『プリティ・ウーマン』(90年)、『プリティ・ブライド』(99年)、『プリティ・プリンセス』(01年)に続く『プリティ』シリーズ第4作は、ケイト・ハドソン扮するキャリアウーマンが、姉の残した3人の子育てに悪戦苦闘しているうちに、1番大切なものを見つけ、女の幸せに目覚めていくというお話。しかし、これって時計の針をかなり逆回転させているのでは? 今はやりの(?)アメリカの「新保守主義」の中には、古き良きアメリカを懐かしむこんな風潮も含まれているの……?

## 第3章

身近な人を大切にしたいくなる

### 『プリティ』シリーズ第4作の主人公は?

ゲイリー・マーシャル監督の『プリティ・ウーマン』(90年)、『プリティ・ブライド』(99年)、『プリティ・プリンセス』(01年)に続く『プリティ』シリーズ第4作の主人公は、ケイト・ハドソン扮する25歳のキャリアウーマンである三女、ヘレン。

彼女の仕事は、ドミニク・モデル・エージェントのトップ・エージェント。そして、彼女が住むのは例によって(?)ニューヨーク・マンハッタンの高級マンション。

長女のリンジー(フェリシティ・ハフマン)も次女のジェニー(ジョーン・キューザック)も既に結婚し子供もいるが、三女のヘレンだけは独身ライフを満喫しつつ、仕事面でも自信満々。その未来は大いに輝いていた……。

## 長女の遺言による親権者の指定は？

長女のリンジーには、15歳の長女オードリー（ヘイデン・パネッティアー）、10歳の長男ヘンリー（スペンサー・プレスリン）、そして5歳の次女サラ（アビゲイル・プレスリン）の3人の子供がいたが、突如このリンジー夫婦が交通事故で死亡。しかし、何事も用心深いリンジーの夫のおかげでリンジーは遺言を書いており、そこには万一の場合の親権者の指定も……。弁護士からそれを聞くヘレンもジェニー夫婦も、親権者は当然、自他ともに良妻賢母と認めるジェニーだと確信していたが、その予想に反して、何とヘレン。それは一体なぜ……？

## ホントにこんな決断ができるの？

弁護士からリンジーの遺言を聞かされたヘレンとジェニーは、それぞれ1通の手紙を渡された。そして、それを読んだヘレンは即座にリンジーの3人の子供の世話をすると宣言。そりゃムリだろう、ホントにそんなことができるの？ と思ったのは、ジェニーだけではなく、3人の子供たちも同じ……？

リンジーの手紙には、何が書いてあったのか？ そしてなぜヘレンは自分のキャリアを捨ててまで、子育て路線を決断したのだろうか？ もっともこの時点では、ヘレンは3人の子育てをすること＝自分のキャリアを捨てることとは考えていなかったことは後から明らかになるが……。しかし、この決断は現実問題としてはかなり不自然……。もちろんこれは映画上だけのお話だが、いくらロマンティック・コメディというジャンルでも、ちょっと無理筋では……？

## ヘレンが失っていくものは……？

リンジー夫婦の3人の子供を引き取ったことによって、ヘレンの生活が一変したのは当然。その第1は、数日間の休日をとって、マンハッタンのマンションを引き払い、クィーンズ区の賃貸アパートに入居。そしてテキパキと子供たちの幼稚園や学校を決めたまではよかったが……。もちろん、ヘレンはモデル・エージェントの仕事の続けながら、3人の子育てをやるつもり。したがって、休暇が明けるとすぐに三女のサラを連れてファッションショーに出かけたが、そこでサラ

のおかげで大失敗を。

他方、自分も小さい子供がいるためヘレンに対して理解を示すモデルもいた。そのモデルの協力を得て、仕事を中断してまで呼び出された幼稚園に赴いたヘレンだったが、そこでモデルが、幼稚園の子供たちから油性マジックで顔に化粧されるという、とんでもないハプニングが起こることに。仕事に厳格なドミニク・モデル・エージェントの女社長ドミニク（ヘレン・ミレン）からは、「これではムリね」と言われ、当然のごとくヘレンも同意。

それまでの輝くようなキャリアを失ったヘレンは、なおその栄光を求めてファッション業界での仕事を求めたが、3人の子持ちの女を雇ってくれるところなどあるはずなし。遂にわらをもすがる思いで、ヘレンは中古車販売店の受付の仕事にありつけたが、ヘレンは本当にこんな仕事で満足できるの？ そしてこの仕事をしながら、立派に3人の子育てをすることができるの？ ヘレンはそれまで持っていた輝きを1つ1つ失っていくばかりでは……？

### 恋人役は存在感が今イチ……？

『プリティ』シリーズの第1作『プリティ・ウーマン』の主演はジュリア・ロバーツ扮するコールガールだったが、そのコールガールが淑女へと変身していくお相手となったのはリチャード・ギア扮するウォール街の実業家で、そりゃカッコ良かったし、その存在感もタップリだった。しかし、この第4作でヘレンのお相手となる男性は子供たちの学校の校長先生で牧師のダン（ジョン・コーベット）。牧師ながら女性を口説くのが上手そうで、ヘレンは3人の子供たちとヘレンを親身になって気遣ってくれるこのダンと次第にいい仲になっていくことに……。しかし、リチャード・ギアと比べるともちろんのこと、この映画のストーリー構成上も、その存在感は今イチ……。

### 15歳の女の子のしつけ方はこれでいいの？

この映画にシリアスなものを求めてもダメなことはわかっているが、15歳という年頃の女の子の教育がきわめて難しいことは容易に想像がつくもの。日本では15歳ともなれば、もはや親が口出しすることがほとんどできず、娘の方が立場が

強いという親子関係がたくさんありそうだが、この映画を観ているとアメリカの家庭教育の厳しさがよくわかる。

15歳の女の子が抱える最大のテーマは男問題だが、ダンの忠告によると、オードリーがつき合っている同級生の男は札つきの不良らしい。しかし、子供を叱りつけることができないのが、ホントの親ではないヘレンの弱味……。陰に隠れてコソコソとデートをくり返していたオードリーは、遂に「プロムの日」に2人してプロムの会場から姿を消してしまったから大変。とても自分だけではこの事態に対応できないと判断したヘレンは、ダンとジェニーの応援を求め、遂にモートルの中にしげこんでいる2人の元へ急行することに成功。しかしその部屋の中に「突入」して、オードリーに対しては「すぐに家に帰れ」と命令するとともに、相手の男を叱りつけることは「嫌がられるのがイヤ」と思うヘレンにはできず、それはすべてジェニーの役割に……。これではやはり、ヘレンは母親失格と言われても仕方がない……？

## 二転、三転の物語は「古き良きアメリカ」……？

オードリーのモートル事件ですっかりまいてしまったヘレンは、やはり3人の子育てはムリ、子育てはジェニーに任せるのがベストと判断し、3人の子供たちはジェニーの元へ。すると、待っていたかのようにヘレンをドミニク・モデル・エージェントの女社長が訪れ、元の職場への復帰を要請したばかりか、ヘレンはマネージャーの地位に出世できることに。これで万々歳、あの独身時代の華やかで楽しい毎日の生活に戻ることができる、そう考えたヘレンだった。

そしてまたファッション業界での忙しい毎日が始まったが、なぜかヘレンの気持にはポッカリと大きな穴があいたような空虚感が……。これは一体なぜ……？ そんな中、ヘレンは再度どんな決断をするのだろうか……？

この映画が描く二転、三転の物語は、まるで「古き良きアメリカ」を観ているよう。長女のリンジー、次女のジェニーに続いてキャリアウーマンであった三女ヘレンも「良妻賢母」になっていくのだろうか……？ アメリカでは新保守主義がはやっているが、この映画もその流行の表れの1つ……？

2006(平成18)年2月22日記

## 「映画検定4級」に見事合格！

06年6月25日、第1回映画検定が全国5カ所で開催された。これはキネマ旬報社とキネマ旬報社映画総合研究所が「映画はエンターテインメントであると同時に、多くのことを学ぶことが出来る時代の扉でもあります」「映画をもっと楽しむための、腕試しの道場のようなものとして、映画検定試験を発売しました」との趣旨ではじめて実施したもの。4級（入門コース）、3級（初心者コース）、2級（上級コース）、1級（ファン達人コース）があり、今回は4～2級のみを実施した。設問は四者択一のマークシート式で60問を45分で解答するもの。問題は作品や監督、俳優に関するもののほか、映画会社や映画用語に関するものもあ

た。受検者は、3000名程度との予想を大きく上回る8633名。下掲記事は友人の朝日新聞記者が7月3日付朝刊に掲載した私のコメント。他には2級を受検した大森一樹監督のコメントもあった。合否の発表は7月24日発送とのこと。さて、その結果は？ 自己採点では9割以上正解できたという自信があったため、「直前にこれだけ勉強したのなら3級も受けておけばよかった」と思ったが、そんな大口を叩けるのは合格通知を受け取ってからのこと……。そして7月26日下掲の4級合格証が届いた。次回の試験は12月3日。さて公約(?)どおり、3級合格を目指しての挑戦は如何に……？

2006（平成18）年8月17日記

### 第3章

身近な人を大切にしたいくなる

